

教頭が主導する市の悉皆研修と校内研修を効果的に繋ぐ教員研修プログラム

—児童・生徒に学び方を身につけさせる学校図書館活用を学校経営に位置付けて—

富永 香羊子*

An effective teacher training program proposed by a vice principal that links the training by the board of Education with the training at school.

-Teaching students how to learn through making good use of school libraries as school management.-

by Kayoko TOMINAGA

2020年度より本格実施される学習指導要領¹⁾には、「学校図書館を計画的に利用しその機能の活用を図り、児童生徒の主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善に生かすとともに、児童生徒の自主的、自発的な学習活動や読書活動を充実すること」と明記されている。若年層教員が半数を占める市川市の学校体制において、これらを実現させるためには、学校図書館を授業の中で効果的に活用できる教員を育成することが、喫緊の課題であると考えられる。本市では、2016年度より教育委員会による、教員が学校図書館を活用した授業ができるようになるための悉皆研修を実施している²⁾。本研究は、それらの教員研修プログラムの効果を高めるために、市内7校の教頭がチームとなって、学校図書館を活用するための校内研修と繋ぎ、学校経営に位置付けて、児童生徒に学び方を身につけさせるための授業改善に繋げる方策を検討した。

その結果、教頭が関わることによって、教員は、学校経営案を踏まえ、学校図書館の活用を通してカリキュラム・マネジメントを意識した授業改善を行うようになることが分かった。さらに、児童生徒は、学校図書館の活用によって、様々な情報に触れることで、主体的・対話的で深い学びを獲得することが推察された。

●キーワード： 教頭、学校図書館活用、学校経営、カリキュラム・マネジメント、校内研修、授業改善

1. 問題の所在と研究の目的

1.1 問題の所在

学校教育では、学習指導要領の全面実施を目前に控え、社会に開かれた教育課程の実現に向け、「どのように学ぶか」という「学び方」の習得に重点が置かれている³⁾。現在、各学校では、児童生徒の「主体的・対

話的で深い学び」の習得に向けて、様々な準備を進めているところである。

このような中で、学校図書館は、学校教育法施行規則において全ての学校に設置されており、児童生徒が「学び方」を学ぶ場所として適切な場所の一つであると考えられる。また、文部科学省は、子どもの読書サポーターズ会議において、学校図書館の活用高度化に向けた

原稿受付：2019年 10月 29日

* 千葉大学大学院

視点と推進方策の中で、学校図書館の機能として「学び方を学ぶ場」の整備について言及している⁴⁾。

市川市は、1950年代より図書活用の重要性に着目し、「読書教育」の推進を図ってきた。「読書教育」は、「後伸びする力」の育成であり、そのために一人でも多くの本好きな児童を育てたいという、教員の願いから生まれたものである⁵⁾。本市では「生きる力・夢や希望を育む学校図書館」という学校図書館像を掲げ、「生涯にわたって学び続ける市民の育成」を目指している⁶⁾。これらの考え方は、次期学習指導要領が示す社会に開かれた教育課程の考え方に通じるものである。生涯にわたって学び続けるためには、学びに向かう力が必要となり、その素地形成の一端を担うのが学校図書館の活用である。

しかしながら、現在、教員の若年層化が急速に進む中で、全ての教員が、学校図書館を活用して児童生徒に「学び方（主体的・対話的で深い学び）」を身に付けさせるための授業を展開できるわけではない。そもそも、学校図書館を活用した授業を経験したことがない、見たこともないという教員も多い。

松本は、学校図書館における教員に対するサービスは学校図書館法には明記されているが、これまでの日本の学校では、児童へのサービスが中心で教員へのサービスはあまり考えられてこなかったと述べている⁷⁾。

また、教員が学校図書館を使う意義・必要性を実感し理解することで、教科（国語・社会・総合・生活科・理科）における学校図書館の利用が進むようになる。学校図書館利用を年間授業計画に記載し教育課程に位置付けることで、学校図書館を効果的に活用するようになることも述べている⁸⁾。

教員が学校図書館を活用した授業経験がないという状況を鑑み、市川市教育委員会では、2016年度から、教員が、学校図書館を活用した授業を展開できるようにするために、「学校図書館を授業で活用するための教員研修プログラム」⁹⁾を教職4年の教員に悉皆研修として開始した（以下、4年目研修）。

4年目研修は、「①学校図書館を活用した授業に熟達した教職10年程度の教員を選出して授業を行ってもらい、その授業を4年目教員が参観する」、「②参観後、4年目教員は、授業者より授業で学校図書館を活用する際のアドバイスを受け、自校で学校図書館を活用した授業を実践する」、「③授業実践の結果を教育委員会に報告する」という①～③の内容で実施している。

これは、本市に在籍する教職4年を迎える教員に対して、校種に関わらず実施している研修である。この研修は、教員の指導観及び期待感への一定の効果が検証されたが、継続的な研修制度の必要性について課題があげられた²⁾。

そこで、学校経営の中に研修を位置づけ、継続的にを行うための学校体制を確立する必要があると考えた。

1.2 研究の目的

市川市教育委員会の実施する、4年目研修について検証し、その課題を明らかにして、さらに研修の効果を高めるための方策を検討することを目的とした。学校図書館ガイドライン¹⁰⁾では「校長は学校図書館の館長としての役割も担う」と明記されている。そこで、本研究では、これらの実践を学校図書館の副館長として、教頭が行うこととした。平久江は、校長の図書館の現状に対する意識に関する質問の回答では「教育目標の達成への貢献」に74%が肯定的な評価をしていると述べている⁹⁾。教育目標を達成させるためには、学校経営の中に位置付けることが必須である。そのため、教頭が関わることによって、学校図書館の活用を学校経営の中に、必須項目として位置付けることが可能となると考え、その方策についても検討していく。

さらに、学校図書館の活用を、カリキュラム・マネジメントを踏まえた授業改善に繋げるための学校体制及び校内研修等の在り方について考えるとともに、教員研修や授業改善に向けた取り組み等を行うことによって育まれる、児童生徒の「学び方」の習得についても言及する。

2. 研究の方法及び結果

市川市教育委員会による4年目研修を受講した教員26人に対してインタビューを行い、その効果と課題を明らかにし、課題を解決するための方策としての教員研修プログラムの確立について考える。その際、教頭が中心となって校内研修への位置づけを行い、教員の授業改善を踏まえた児童生徒の学び方の習得を目指す。

2.1 調査方法

2.1.1 インタビュー調査における質問項目の設定

インタビューを実施するにあたり、11項目の質問を作成した（表1）。質問項目の内容については、文部科学省「学校図書館の整備充実に関する調査研究協力者会議」¹⁰⁾の座長を務められ、「学校図書館ガイドライン」の作成にも携われた、青山学院短期大学 堀川照代教授から、学校図書館活用の視点から指導、助言をいただいた。また、千葉大学教職大学院 高度教職実践専攻 スクールマネジメント分野 重栖聡司教授（元公立中学校校長・元千葉県教育委員会教育振興部長）からは、カリキュラム・マネジメントを踏まえた管理職

の立場からの視点で、指導、助言をいただいた。

表1 質問項目

【質問項目 全11項目】

1. 初めて図書（教科書以外）を使った授業を行ったのはいつですか。
2. 4年目研修の授業を行ってみて、どう思いましたか。
3. 次年度以降も、図書（教科書以外）を使った授業を行っていますか。
4. 図書（教科書以外）を使った授業を行う上で、困っていることはありますか。
5. 今後も図書（教科書以外）を使った授業を行いたいと思いますか。
6. 図書（教科書以外）を使った授業からどんなことを期待しますか。
7. 4年目研修を受けて、先生自身が、児童生徒に学校図書館を効果的に活用させるためのスキルは、身についたと思いますか。
8. 教員が、児童生徒に学校図書館を効果的に活用させるスキルを身に付けるためには、何を行えばよいと思いますか。
9. 学校図書館活用研修を校内で行としたらどのような学校体制が必要だと思いますか。
10. 学校図書館活用を推進するための学校体制には、どのようなことを期待しますか。
11. 学校図書館活用は、授業改善にどのような点につながるとと思いますか。

2.1.2 半構造化面接及び分析方法の決定

筆者（教頭）が在籍するA小学校の4年目研修を受講した5～7年目教員6人に対して、インタビューを行った。面接時間は、一人25分～45分であった。

教員が4年目研修に対して、どのような効果を感じているのか、また、どのような課題を感じているのかを、4年目研修の受講者に焦点をおいて、インタビューを行った。したがって、分析内容は、内的な要素を含むため、データに密着した分析が必要となる。

そこで、グレーサーとストラウスによって考案された質的研究である、グラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下、GTA）¹¹を、実践しやすく改良した、木下（2010）の修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下、M-GTA）¹²による分析が適していると判断した。M-GTAは、協力者（本研究においては、4年目研修を受講した教員）が語る具体例をもとに分析ワークシートを作成しながら概念を作成してい

く分析方法である。そのため、オリジナルGTAのように、プロトコルデータの断片化は行わない。また、分析は①半構造化面接、②分析テーマの設定、③概念生成、④カテゴリー・コアカテゴリー生成、⑤結果図の作成、⑥ストーリーライン作成の手順で理論化を行った。したがって、インタビュー形式は、半構造化面接とした。

2.1.3 質問紙調査の実施

A小学校での半構造化面接の結果、面接を実施するための教員への時間的な拘束と、教頭が直接、教員に話を聞くことによる回答への付度が懸念された。そこで、他の6校の教頭と協議した結果、他校では、半構造化面接が難しいと判断し、質問紙調査という方法で実施することとした。しかし、回答者から質問項目への問い合わせや意見があった場合は、教頭が回答し、逆に回答に対して疑問点がある場合は、教頭から回答者に対して質問をすることで、半構造化面接の形式を一部残した。前述のルールに従い、A小学校以外の6校（小学校4校・中学校2校）の教頭が、各学校の5～7年目教員、計20人に対して、A小学校での半構造化面接と同内容の項目で、質問紙調査を実施した。

2.1.4 半構造化面接と質問紙調査の結果の統合

先行実施したA小学校6人の半構造化面接での結果と、質問紙調査を行った6校20人の結果を合わせて分析を行うため、双方の回答に乖離が無いかを確認するため、人工知能「AIテキストマイニング」¹³を使用して、回答内容を比較して確認した。半構造化面接の回答を文字起こししたものと、質問紙調査の回答を、それぞれAIが、自動的に5つの感情に分け、A小学校（図1）と、その他6校（図2）の5つの感情を表した五角形の形状に現し、さらに、ポジティブ感情とネガティブ感情の2つに分類した。ここでは、AIテキストマイニングの示した5つの感情について、図1及び図2の「喜び、好き」にあたるポジティブ感情を、研修を受けたことによる授業への自信と捉え「研修の効果」とし、「悲しみ・恐れ・怒り」にあたるネガティブ感情を、研修によって発生した授業への不安と捉え「研修の課題」とした（表2）。図1及び図2を7人の教頭で比較、検討した結果、双方の五角形の形状に著しい差異は確認できなかった。よって、半構造化面接と、質問紙調査の結果に差異はないと判断し、両方の回答、26人分を統合して分析を行うこととした。

「AIテキストマイニング」は、(株)ユーザーローカルが提供するフリーソフトで、アンケートの自由記

述や音声ログ等の大量の文章を高速に可視化することができる。自由な形式で記述された文章を単語や文節に分割して、その出現頻度等を分析し、有益な情報を探し出す技術であるため、今回の分析に採用した。

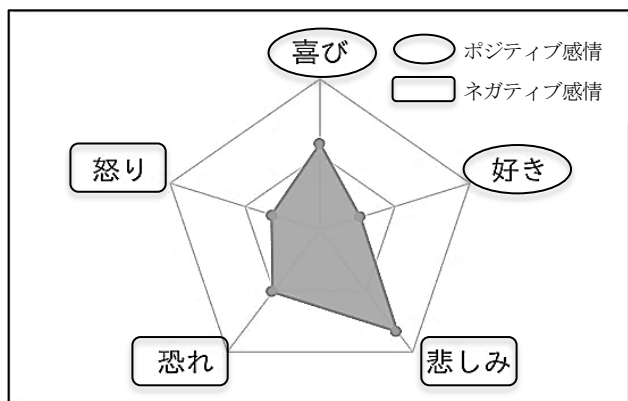


図1 AIテキストマイニングによる分析A小学校

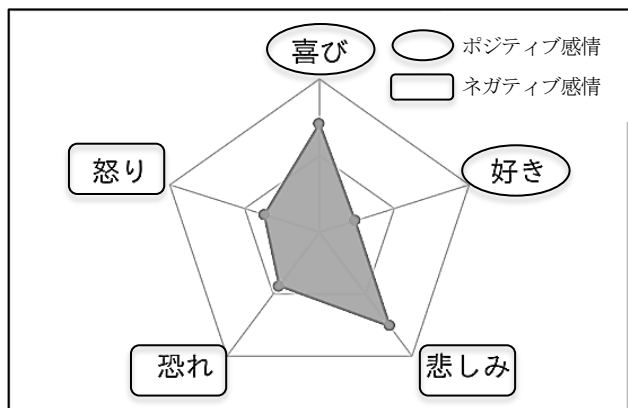


図2 AIテキストマイニングによる分析
その他6校

2.2 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチによる分析

2.2.1 概念の生成

概念の生成を行うために、分析テーマを「学校図書館活用ができるようになるための教員研修プログラム確立へのプロセス」とし、分析焦点者は、4年目研修を受講した教員とした。

次に、26人のデータを、概念ごとの分析ワークシートに分類した。概念の生成及び定義付けにあたっては、7校の教頭が協議し検討を行った。データから得られたバリエーション（発言及び記述内容）の分類については、その内容から、1つの概念だけでなく、複数の概念に関連するものもあり、概念の決定に至るまでに、概念の統合や分割を繰り返し丁寧に行った。その結果、A～Pの16の概念と定義（表3-18）を抽出した。

2.2.2 カテゴリー、コアカテゴリーの生成と結果図

表2 調査結果

半構造化面接の結果

26人からの調査結果（データ）の分類（一部抜粋）

【研修の効果（喜び、好き）】

- ・学校図書館の活用方法が分かった。
 - ・活用方法をイメージすることができた。
 - ・学校図書館の必要性を感じた。
 - ・子供が意欲的に活用していた。
 - ・子供の主体的な学びに繋がった。
 - ・学校司書との連携が大切だとわかった。
 - ・学校図書館という学習環境の大切さが分かった。
- 等

【研修の課題（悲しみ、恐れ、怒り）】

- ・1回の授業（研修）だけで、学び方を十分に習得させることは難しい。
 - ・今回だけで、学校図書館を活用した授業の力が十分についたとは言えない。
 - ・非常勤の学校司書が配置されている場合、学校図書館が常に使える状態があるわけではないので、学級数が多いと時間割を組むのが難しい。
 - ・各教科との連携もしなければいけない。
 - ・学校図書館の位置が遠く、移動時間がかかってしまうので行きにくい。
 - ・教科ごとに複数の教員で行うため、時間の調整が難しい。
 - ・年間計画を踏まえて、しっかり年度初めに学校図書館活用計画を立てて行わなければいけない。
 - ・何のために学校図書館を使うのか、授業のねらいを明確にする必要がある。
- 等

16の概念ごとに内容を一つずつ整理し、I～VIの6つのカテゴリー「学校図書館活用への期待」、「学校図書館活用への不安」、「学校経営における学校図書館活用」、「教員のカリ・マネへの意識」、「教員の授業改善」、「子供の主体的な学び」に分類した。

それらをさらに整理し、3つのコアカテゴリー「市教委による悉皆研修の実施」、「学校体制及び校内研修」、「教員の指導力及び子供の学習意欲の向上」に集約し、結果図「学校図書館活用の教員研修プログラム確立へのプロセス（図3）」を作成した。

これによって、学校図書館を活用できるようにするための教員研修における課題点の可視化を図った。

表3 概念01

概念 01	A 学校図書館活用方法の理解 (1. 学校図書館活用への期待)
定義	学校図書館活用の重要さを感じたことにより、活用方法への理解を深めた
バリエーション	
①	年度当初に、学年で、どの教科のどこを学校図書館活用にするか決めてしっかりと単元を組みなおすことが一番有効だと思う。 すごく大切というか、今後やっていかなければいけないと思う。
②	テストには関係ないことでも、小学校の段階で子供の興味関心を引くという意味で、学校図書館資料をうまく活用していくことが、すごく大事なのかなと思った。
③	今までも調べ学習はやってはいたけれど、学校図書館を使って、学校司書と一緒に単元の選択から考えて行ったというのが、今回初めてだったのですごく勉強になったと思う。
④	学校図書館の活用は、本を読むということではなく、本を読むことでどういう力をつけたいかということが大切だと思った。
⑤	良い資料があれば子供の主体的・対話的で深い学びにつながる。
⑥	こういう時に、学校図書館を活用すればいいんだな、学校司書に、相談すればいいんじゃないかなということが分かった。
⑦	研修を受ける前から活用していたのですが、理科の授業を参観したので、理科に対する学校図書館の活用の仕方という新しい見方が勉強になった。 少しずつ活用を広げていくということで、他の資料の活用力も上がってくると思う。 図書の活用を広げていくことが大切。
理論 的 メモ	・学校図書館を活用した授業の参観、実践を通して、活用場面や活用の仕方について理解した。 ・学校図書館の活用研修をきっかけに、学校図書館の活用への必要性を感じたことで、活用への理解が深まった。
概念 の 生成	研修を受けたことで、学校図書館活用の必要性に気付く、活用方法への理解を深めたことから【学校図書館活用方法の理解】とした。

表4 概念02

概念 02	B 学校図書館活用イメージを掴む (1. 学校図書館活用への期待)
定義	学校図書館の活用方法を理解したことにより、授業での活用方法の見通しを持った
バリエーション	
①	今回の研修を受けて、自分でも授業をやってみて、子供に本を選ばせたり、情報を子供にあげたいと思った時にどういう風に学校司書と打ち合わせたりすればよいかということが分かったという点では、自分の中のスキルは身についたと思う。 研修がとても良い経験になって、使い方が分かって良かったと思う。
②	学校図書館を活用することで、子どもが自分で作る授業になるんだということが分かった。
③	今回、授業をやった大切だと思ったので、また別の授業にも活用が繋がるかなあと思った。
④	うまく図書館を活用できたら、子どもたちの学びが深まるのかなと思う。
⑤	子供達は、本を読むことは嫌いじゃないと思うので、図書室に行けばきっとたくさん本を読むようになって、自然とそこから得た知識を活用できると思う。本を読むことが、学びに繋がるということを教員が意識すればよいと思う。
理論 的 メモ	・熟達者の授業を参観し、授業進め方や子供の反応について、イメージを持つことができた。 ・イメージと共に、実際に活動している子供の姿から、学校図書館を活用した授業の実践への自信が持てるようになった。
概念 の 生成	悉皆研修を通して、図書活用の授業を参観したことで、学校図書館活用の授業の流れを理解し、授業のイメージを持つことができたことから【学校図書館活用イメージを掴む】とした。

表5 概念03

概念 03	C 悉皆研修による不安 (2. 学校図書館活用への不安)
定義	市教委の行う悉皆研修が一回しか行われないうことへの不安と自分の授業スキルとの乖離を感じたことへの不安
バリエーション	
①	市の研修は一回きりだったので、活用がちゃんとで

	きているのかわからない。
②	悉皆研修に入っていないとやらなかったと思う。
③	自分一人で、学校図書館活用のスキルを身につけようって思っても限界があると感じた。
④	情報の中には、本当に正しいものもあればそうでないものもあるから、そこはしっかりと図書館活用で教えて、考えさせていかないといけないと思った。
⑤	市の研修で9月に授業をみても単元計画が難しい。(当初、6月に熟達者の授業参観だったが、昨年度から2学期以降に変更になった)
⑥	学校図書館活用の色々なパターンの授業を見たことが無いので、見た授業のことしかわからない。他にも見たいと思った。中学なので、自分の教科と同じ授業が見たかった。
⑦	悉皆研修の一回だけでは、実際には、身に付いてないような気がする。
⑧	授業を見て、どこで学校図書館を使うのかってことを、先生がわからないといけないと思った。今までわかってなかった。
⑨	見せてもらったことで、あとは自分でやらないとスキルはつかないと思った。参観した授業をその時の自分のクラスでやろうと思ったけど、難しさを感じた。
⑩	自分はできないので見させていただいて、とっても素晴らしいと感じた。でも、なかなかマネができないと思った。
理論的メモ	・市教委の行う学校図書館活用研修は、一回しか行われないうえに、活用のきっかけにはなるが、定着には結びつかないと4年目教員は感じている。 ・熟達者による実践授業のレベルが高度すぎると、4年目教員は自分にはできないと劣等感を感じてしまう。
概念の生成	学校図書館の活用方法を知ったことで、自らの授業実践との違いに気付き、不安を感じたことから【悉皆研修による不安】とした。

表6 概念04

概念04	D 校内研修・体制への不安 (2. 学校図書館活用への不安)
定義	学校内で行われる学校図書館ガイダンスや研修に関する不安

バリエーション	
①	若い人が増えて、図書館の活用方法が分かってない人もいるので、もっと学校でいろんな図書館活用の情報を知ることができる機会があるとよい。
②	学校司書と連携を取ることが限りなく少ないので、研修を通して話をする時間を作らないといけないと思った。
③	「こんな使い方があります」というガイダンスを毎年聞いているはずだと思うけれど、一年たつと忘れてしまう。
④	実際に図書館に行って、図書館で「この本ありますよ」とかいう、具体的な紹介があればよいと思う。○年生向けに「こういう本があるから～とかに使えますよ」っていうことが知りたい。4月の最初の頃に学校司書にやってもらおうと、この時に使えるということをメモしておく。
理論的メモ	・学校内において年度当初にガイダンスや研修を行うことが重要である。 ・毎年、行われて聞いていても忘れてしまうこともある。
概念の生成	悉皆研修を行った後、継続的な活用を行うための校内体制への不安や、ガイダンス等への不安が生じたことから【校内研修・体制への不安】とした。

表7 概念05

概念05	E 授業実践への不安 (2. 学校図書館活用への不安)
定義	学校図書館を活用した授業の方法が完全に習得できていないことへの不安や自信のなさ
バリエーション	
①	情報化社会だから、常に情報も変化しているので、どのような図書を使ったらよいかという点が、難しいなと思った。
②	まだ4年目なので、自分の持っている情報や資料があまりにも乏しいと思った。
③	マンガを読んで読書通帳がすごく溜まってく子がいるが、読む力がついていないのか分からない。
④	国語の授業で、意見文を書くときに、ウィキペディアでもいいのかなと思いつつ、これが本当かどうかの判断ができないまま使ってしまうことがあった。
⑤	もっとたくさん授業を見たいが、なかなか機会がない。
⑥	どこで図書館を使うのかわかっていないと、授業が

	できないと思った。
⑦	授業は不安です。そんなに国語とかもしっかりとやってきたわけではないので。 ずっと算数の研究校だったので。
⑧	専門的なところの知識が不足している中で、やっぱりどうしても最初の導入のところが上手く行かないと思う。
理論的 メモ	・経験が浅いことへの不安や、学校図書館の活用方法や授業に使える図書を知らないことへの不安がある。 ・どのように授業を行えばよいかわからない。
概念 生成	授業の中で学校図書館をどの場面でどのように活用したらよいか確信が持てず、不安に感じていることから【授業実践への不安】とした。

表8 概念06

概念 06	F 図書館割当ての時間割への組込 (3. 学校経営における学校図書館活用)
定義	一週間の時間割の枠内に、学校図書館が活用できる時間が割り当てられていることの重要性への気付き
バリエーション	
①	やっぱり週に一度は図書室に行かなければいけないと思った。
②	時間割に入っているとよい。 「空いている時間に自由に来て」ではダメだと思う。 高学年でも5年生は6年生と抱き合わせで、毎週裏表とかでも前半後半に分けて行ける方がよいと思う。図書の時間が時間割に入っていた方がよい。 子供も○曜日は図書があるからと、決まっていると、その日に合わせて本を持ってくる。 図書の時間が時間割にあると、その日に向けて、調べ学習等も計画できるので、時間割には必ず入れて欲しいなと思った。
③	時間割に図書館の活用時間が入っていると、あらかじめやることを決めて、図書の時間に向けて、図書の準備を学校司書にお願いすることができる。
④	図書の時間を強制的に入れておくと、そこは、使えるって思うので、入れて欲しいと思った。 低学年の子は、図書室に行くのを楽しみにしている。
⑤	やっぱり時間割に入っていないと、行かなくてもまあいいかなあみたいな感じになってしまう。 時間割の枠にあると、子供も意識するようになると

	思う。
理論的 メモ	・時間割の中に学校図書館の活用が組み込まれていると活用できる。 ・時間割に組み込まれていないと、億劫になる。 ・時間割にないと活用しないのか。 ・時間割があれば必ず活用できるのか。
概念 生成	学校図書館の活用を推進するためには、時間割の枠の中に学校図書館の割り当て時間があることが重要だと感じていることから【図書館割当ての時間割への組込】とした。

表9 概念07

概念 07	G 学校図書館活用のルール化 (3. 学校経営における学校図書館活用)
定義	学校図書館の活用の仕方を学校としてルール化することの必要性
バリエーション	
①	高学年は図書室が遠いという理由で行かないのではなく、もっと活用する場面を作る。 子供が読みたいと思うような資料で、学習を進めるというやり方も良いと思う。 高学年だからこそ、何か活用の仕方ということを考えなければいけない。
②	年度当初に、図書について、教員全体で共有できる場所だったり、時間だったりを設けるということはやっぱり必要だと思う。 図書館担当の部会に入れば、使い方とかが詳しくわかるんですが、全体では共有できてない部分がある。 部会があることで部会内に情報がとどまってしまうと、もったいないなと思う。
③	図書館の制度を知らないとやっぱり何も始まらない。
④	どんな時に、学校図書館をどのくらい活用すればよいのか、学校司書に、なにを相談すればよいのかわかるようにするとよい。
⑤	どの場面で図書館を使うと効果的なのかを考えていかないといけないと思う。 具体的な利用場面が、わかるとよい。
⑥	今年は、図書館部会から、去年みたいな活用の提案がされていない。 去年は、国語とか算数とか生活科とかの教科書を全部見て、紹介されている本を全部借りて、1年生で

	<p>は授業をやっていた。</p> <p>今年は、図書館部会から提案がなくて、データとしては残っているんですけど。</p> <p>去年は、学年で授業に必要な図書を回して必要な時に使うみたいな感じでやっていたんですけど、そういうのもあるといいのかな。</p> <p>図書館利用の枠が決まっていると、こちらも意識して図書館を活用できるのかなと思った。</p>
⑦	<p>学年会を図書館でやるのもよい。</p> <p>教員も子供も図書館に行くことが大切。</p>
理論的 メモ	<ul style="list-style-type: none"> ・活用の仕方を知らなかったり、わからなかったりすると活用することができない。 ・活用の仕方をルール化することで、誰もが使いやすくなるだけでなく、効果的に活用することができる。 ・学年会を学校図書館で行うのも良いかもしれない。
概念の 生成	<p>学校体制としての活用のルールが必要であると感じていることから【学校図書館活用のルール化】とした。</p>

	<p>した授業研究をしてきたので、本の世界にどっぷりとつかう授業を学んだ。</p>
⑥	<p>学年との連携が大切で、若い先生は流れが分からないから、校内研究で授業をやってみることが大事。</p>
⑦	<p>若い人たちも大変な部分があると思うので、この単元はこういうふうなやり方があるというのを見て、それでやってみると、活用の仕方ってというのが自然にわかって、図書館活用をやるうって思うようになると思う。</p> <p>見たことのないことはできないと思う。</p> <p>すぐとなりのクラスの主任の授業が、勉強になった。</p>
理論的 メモ	<ul style="list-style-type: none"> ・学校図書館の活用の仕方が分からない教員には、研修が活用のきっかけとなる。 ・市の悉皆研修だけでなく、校内研修にも位置付けることが必要である。
概念の 生成	<p>学校図書館の活用に関する校内研修を行うことへの必要感から【校内研修体制の整備】とした。</p>

表 1 1 概念 0 9

表 1 0 概念 0 8

概念 0 8	<p>H 校内研修体制の整備 (3. 学校経営における学校図書館活用)</p>
定義	<p>定期的な学校図書館活用に関する校内研修の実施により授業での活用の推進が図られる</p>
バリエーション	
①	<p>市の研修がきっかけで、ちゃんと学校図書館のことについて学ぶ時間が取れたかなと思う。</p> <p>学校内でもやってもらえると、図書館活用を続けられると思う。</p>
②	<p>ミニフレッシュマン研修で学校司書に教えて頂いたのですごく勉強になった。</p> <p>どういう図書があるかっていうのがわかると、学ぼうって思った時に、司書教諭や学校司書に頼るだけじゃなくて、自分でも色々視野を広げられる。</p>
③	<p>今回は、同期が詩の授業をやったので、活用できるんだな、面白そうだなと思って、簡単なところからやってみようかなって思った。</p>
④	<p>フレッシュマン研修で、必ずやらなければいけないというように決めるとよい。</p>
⑤	<p>前任校で、本の世界観に浸るっていうことを大切に</p>

概念 0 9	<p>I 年間計画の見直し (4. 教員のカリ・マネへの意識)</p>
定義	<p>年度当初に授業の見通しを立て、年間計画を確立することの重要性</p>
バリエーション	
①	<p>年度当初に、学年で、どの教科のどこを学校図書館活用にするかを決めてしっかりと単元を組みなおすことが一番有効だと思う。</p>
②	<p>単元計画をしっかりと考えなければいけないし、教材研究をきちんとしていないと、図書館にたどり着かない。</p>
③	<p>授業する時に学校司書に色々なやり方を学んだので、本を読むだけでなくその単元全体でこの部分に本がいるということがわかり、単元を通して全体的に活用できるということを教えていただいたのが勉強になった。</p>
④	<p>1年間を通して、あらかじめ図書館を活用するところを決めておくことが大切だ。</p>
⑤	<p>自分が、学年の始めに全ての単元を分かっているかが重要だ。</p> <p>どこで図書館を使うのかっていうことがわからないといけないと思う。</p>

⑥	年度当初に自分が全ての単元を分かっているかどうかが大切だ。 年間指導計画はあるんですけど、全部を意識して見ていなかった。 これからは、カリ・マネをしっかりと意識して確認しないといけないと思った。
理論的 メモ	・学校図書館の活用をする際、必然的に、教育課程を見直し、学校図書館の活用が有効な教科や単元を探すことになる。 ・学校図書館の活用は、教科横断的な視点を持つことによりカリキュラム・マネジメントに繋がる。
概念の 生成	学校図書館の活用は、年度当初に計画を立てて行うことが重要であることから【年間計画の見直し】とした。

表 12 概念 10

概念 10	J 学年・教科等の連携 (4. 教員のカリ・マネへの意識)
定義	学年や教科ごとの連携を通して、活用することへの効果
バリエーション	
①	やっぱり学年でどの教科のどこを図書館活用しようとか、どこを教科をまたいで横断的に活用しようかを話し合っ決めていくことが大切だと思う。 中学校は、一人で一つの教科を受け持つわけではないので、他教科との連携だけでなく、同じ教科の中でも確認が必要だ。
②	自分一人でスキルを身につけようと思っても限界があると感じた。 学校司書の先生や学年の先生と、確認しながらいろんな先生のご意見とかを伺っていくことが勉強になる。
③	研究も全教科の計画プラン、年間計画を学年で確認して活用しながらやるのが大切だと思う。
④	学級数が多いと、図書室の利用が重なってしまうので、使う時期をずらしたりする必要が出てくるので、学年内の調整も必要だ。
⑤	同じ教科の先生で、図書館を使う人と使わない人がいる時に、うまく調整するのが難しい。 司書教諭や学校司書にお願いしてやってもらった。
⑥	今回、授業をやるにあたって学年の先生達にも相談した。

理論的 メモ	・小学校では、学年全体で、中学校では教科ごとに連携して、学校図書館の活用を考えていくことが大切である。
概念の 生成	学校図書館の活用には、学年だけでなく他教科との連携が大切だという点から【学年・教科等の連携】とした。

表 13 概念 11

概念 11	K 学校司書の活用 (4. 教員のカリ・マネへの意識)
定義	学校図書館の活用における学校司書の存在の重要性
バリエーション	
①	今回の研修を受けて、自分でも授業をやってみて、子供に本を選ばせたり、情報を子供にあげたいと思った時にどういう風に学校司書と打ち合わせたりすればよいかということが分かった。 学校司書に単元計画も一緒に立ててもらった。 授業で図書館を活用しようというテーマだったからこそできたと思う。
②	学校司書に、あるだけの資料を用意して頂いた。「こういう資料が欲しいです」というとすぐ用意してくれた。 6年生の国語や社会ですごくたくさんの種類の本を用意してもらって活用した。
③	授業をする時に学校司書に色々なやり方を学んだので、本を読むだけでなくその単元全体でこの部分に本がいるということがわかり、単元を通して全体的に活用できるということを教えていただいたのが勉強になった。
④	ミニフレッシュマン研修で学校司書に教えて頂いたのですごく勉強になった。
⑤	学校司書と連携を取ることが限りなく少ないので研修を通して話をする時間を作る。
⑥	学校司書の講話があると良いと思う。
⑦	学校司書が、おすすめの本を出してくださっているのですが、なかなか高学年は図書館に行かれない。
⑧	〇年生向けに「こういう本があるから〜とかに使えますよ」ということが知りたい。 4月の最初の頃に学校司書にやってもらおうと、この時に使えるということをメモしておく。

⑨	学校司書にお願いして持ってきてもらった。 いっぱい集めてくれる。 学校司書の読み語りを見て、こんなことができる先生がいることを知らなかった。 だれにでもできるもんじゃない。
理論的 メモ	・学校司書とどのように連携するのかをわかっていないと活用できない。 ・学校司書が、単元計画の段階から一緒に授業に関わることで、より良い資料の収集が可能となり、効果的な授業ができる。
概念の 生成	学校図書館を活用する際には、学校司書の活用が不可欠であることから【学校司書の活用】とした。

表 14 概念 12

概念 12	L 授業のねらいの明確化 (5. 教員の授業改善)
定義	何のためにどのように学校図書館を活用するのかを明確にする
バリエーション	
①	授業のゴールをきめて、調べる内容を示すことで、子供から「本から探そう」とか「辞書を見る」とかという言葉が引き出せるようにならないといけないと思う。
②	その単元とか授業の中で何を狙うのか、本を読むことでどういう力をつけたいかっていうことが、大事だと思う。 今回は学校図書館を活用するだけでなくいろんな情報から何か新しいものを取り入れて、そこから自分がこう読み取りたいとか、知りたいものを取り入れるとかっていうところで授業をしたので、他の授業とかでもやっぱり狙いをしっかりしてないといけないと思った。 図書館活用は他の授業でもなんか同じかなくて感じた。
③	学校図書館を活用した授業でも、狙いをしっかりしてないといけない。
④	何を調べさせるのか、授業者がしっかりとした目当てを持っていないと、子供は何を調べたらよいかわからない。 ただ、図書館に行って本を読んでも意味がない。
⑤	調べることが分かっていると、図書館に行っても意味がない。

	子供に課題をしっかりと理解させなければいけない。
理論的 メモ	・学校図書館は活用することが目的ではなく、学習のねらいを達成するための手段の一つである。 ・授業のねらいを達成するために活用することによって学び方が身に付く。
概念の 生成	学校図書館の活用は、授業のねらいを明確にして行うことが重要であるため【授業のねらいの明確化】とした。

表 15 概念 13

概念 13	M 探究的な学びへの工夫 (5. 教員の授業改善)
定義	学校図書館の活用により、子供達は教科書だけでは得られない、自分なりの解答を工夫して見つけるようになる
バリエーション	
①	自分が、興味があるところはここなんだけど、教科書にはこれしか書いてない。 でも、もっと知りたいと思った時に図書室に行ってみようかみたいな感じになった。
②	うまく図書を活用できたら、子どもたちの学びが深まると思う。
③	教科書でも必要な部分があると思うんですけど、やっぱりそれだけだときっと子供達には十分ではない。 社会科の授業の導入で、世界の醤油が載ってる図書資料があったのでそれをコピーして子供達に配った。 そしたら子供達が外国語活動指導員に、海外の醤油について聞いてきたり、お母さんがフィリピン出身だからって、フィリピンのことを聞いてきたり、お父さんがタイに単身赴任してるからって、自分たちで聞いて、情報を集め始めた。
④	学校図書館の活用を始めてから、子供達が分からないことがあると自分から図書館へ行くようになったり、自分から誰かに聞いて調べたりするようになった。
⑤	休み時間に「調べてみよう」という子供達の会話が出るようになった。
理論的 メモ	・学校図書館の活用から、子供が次々と主体的な探究活動を行っていく。 ・図書活用から人材活用へも発展していく。

概念の生成	教科書だけでは子供の課題の解決に繋がらない場面では、学校図書館の活用が必要になることから【探究的な学びへの工夫】とした。
-------	--

表 16 概念 14

概念 14	N 生涯学習への基盤づくり (5. 教員の授業改善)
定義	学校図書館の活用を通じた、学び方の習得による、生涯学び続けるための基礎力の育成
バリエーション	
①	学校図書館の活用は、大人になっても大切なことだから、すごく大切というか、今後やっていかなくちゃいけないなと思った。
②	やっぱりインターネットって正しいものもあればそうでないものもあるからそこはちょっと考えていかないとねって。あやしい情報から調べている子もたくさんいたので、ちゃんとしたところで情報を探そうにしないといけない。 これからの時代は、インターネットも使わなきゃならないから、学校図書館の活用を通して選べる力、うそを見極める力を付けること大切だと思う。
③	今回は学校図書館を活用するだけでなく、いろんな情報から自分が知りたいものを見つける授業を行ったので、子供達から、「物知りになった」「調べるのが楽しい」「またやりたい」という声があがった。
④	子供が自分で調べたことって、記憶にも残りやすいし、自分でもできたっていう気持ちにもなるのかなと思う。 また、わからないことがあったら調べようって思うんじゃないかな。
⑤	子供達は、本を読むことは嫌いじゃないと思うので、図書室に行けばきつとたくさん本を読むようになって、自然とそこから得た知識を活用できると思う。本を読むことが、学びに繋がるということを教員が意識すればよいと思う。
理論的メモ	・授業での学校図書館の活用から、自主的な活動へ発展している。 ・図書の活用からインターネット活用へと、自然に応用されていく。
概念の生成	学校図書館の活用は、様々な情報活用能力を育成し、子供の学びを広げることから【生涯学習への基盤づくり】とした。

表 17 概念 15

概念 15	○ 学習意欲の向上 (6. 子供の主体的な学び)
定義	学校図書館を活用した授業を行うことによる学習意欲の向上
バリエーション	
①	学校図書館を活用することで、子どもが自分で作る授業になんだということが分かった。
②	良い資料は、子供の学習意欲につながる。
③	子供達が「これはどうなんですか」とか、今年すごく聞かれた。教科書には載ってないんですよね。自分たちで、図書室から本を借りてきて何か探して読んでいた。 「書いてあった、あった、あった、あった」って、叫びながら、ノートに書いていた。 一人二人だったんですけど、それがもっとみんなに広がればよい。
④	うまく図書館を活用できたら、子どもたちの学びが深まるのかなと思う。
⑤	少しずつ活用を広げていくということで、他の資料の活用力とかも上がってくると思う。 図書の活用を広げていくことが大事。 子供に発達段階に応じたスキルを身につけさせていくことで意欲が高まると思う。
⑥	それをやることで子供に対してどういうメリットがあるかって考える。 図書館活用から得られるもの、子供達への効果っていうのがあるから、やっぱり必然的にやるようになるんじゃないかなと思う。
⑦	休み時間に、子供達が図書室に行って自分たちで調べるようになった。
理論的メモ	・実際の授業では、教科書だけではわからないことがある。 ・授業の中で学校図書館を活用することで、子供達は調べたり、誰かに聞いたりして情報を集める手段を学び、自ら必要な情報を探そうとするようになる。
概念の生成	学校図書館の活用は、子供の興味関心を満たし、学ぶ意欲の向上を促すことから【学習意欲の向上】とした。

表 18 概念 16

概念 16	P 多様な学び方への発展 (6. 子供の主体的な学び)
定義	調べ方の多様化と、情報の発信への意欲
バリエーション	
①	子供が、教科書以外の知識も図書館で借りた本から調べられるようになった。 私が授業の前に資料を用意することも、もしかしたら必要だったかもしれないんですけど、高学年とか中学生だったら自分で図書館に行けると思う。実際に、図書室だけじゃなく、近くの図書館に行って本を借りてくるようになった。調べたことは、友達に紹介して、自然に情報を発信していた。
②	社会科での図書活用から様々なところに広がっていったので、今年はちょっと図書館を活用できたと思う。 図書資料を与えたら、本を読んで調べるだけじゃなくて、そこから自分たちで、どんどんいろんな人にも聞き始めて、情報を集めていった。集めた情報を新聞にして、教室に掲示していた。
③	学校で調べたことを家に帰って家族にも話していると保護者が話してくれた。
④	子供達が自分で調べたことを、他クラスや下級生にも伝えたいと言い出した。
理論的 メモ	学校図書館を活用した授業から、子供達が学び方を習得し、自ら進んで多様な学び方で、情報収集や発信を行うようになった。
概念 の 生成	学校図書館の活用から、公共図書館の活用や人材活用へと発展することから【多様な学び方への発展】とした。

2.2.3 悉皆研修から校内研修を経て教員の指導力及び子供の主体的な学びへ繋ぐストーリーライン コアカテゴリーを<>, カテゴリーを《》, 概念を【 】とする。

多くの教員は、これまでの経験の中で、学校図書館の活用の仕方を学んできているわけではない。経験がないために学校図書館の活用の仕方が分からず、活用に至らないことが考えられる。そこで、<市教委による悉皆研修の実施>によって、学校図書館の活用と初めて出会い、その活用方法を学ぶこととなる。この研修を経験したことによって【学校図書館活用方法の理解】を深め、【学校図書館活用イメージを掴む】ことが

できるようになる。そして、《学校図書館活用への期待》を膨らませ、実践してみようという意欲を持ち始める。しかし、それとは逆に、上手な授業を行う熟達者の授業実践を見たことによって、自らの授業との違いから【悉皆研修による不安】を抱いたり、自らの【授業実践への不安】を感じたりすることもある。また、一回だけの研修では、全てを習得できず、今後の【校内研修・体制への不安】を覚え、それらから《学校図書館活用への不安》が生じることもある。

そこで、悉皆研修後の<校内体制及び校内研修>の必要性が出てくる。その際、教頭が《学校経営における学校図書館活用》について、学校図書館の副館長として、校長の示す学校経営案の中に位置付けて主導し、【図書館割当ての時間割への組込】や、【学校図書館活用のルール化】、【校内研修体制の整備】を教務主任や研究主任、司書教諭や各教科主任を通して行い、教員の学校図書館活用への不安を軽減することで、学校図書館活用への意欲が高まることになる。さらに、【年間計画の見直し】や【学年・教科等の連携】、【学校司書の活用】についても、教頭が、年度当初に校務分掌の各担当教員や学年主任に働きかけることによって、それぞれの担当教員に教育課程全体を見据えた《教員のカリ・マネへの意識》が芽生え、さらに学校図書館の活用が推進される。

これらは、《教員の授業改善》に繋がり、【授業のねらいの明確化】や【探究的な学びへの工夫】、【生涯学習への基盤づくり】が、意図的に行われるようになる。さらに、授業改善によって、《子供の主体的な学び》を引き出し、【学習意欲の向上】や、【多様な学び方への発展】に繋げ、最終的に<教員の指導力及び子供の学習意欲の向上>にたどり着くと考える。

2.3 7校の教頭による実践

7校の教頭が、結果図(図3)「学校図書館活用の教員研修プログラム確立へのプロセス」のストーリーラインを共通理解し、概念及びカテゴリー、コアカテゴリーの中から、自校の課題を選択し、学校ごとに学校図書館の活用における課題解決の方策をたてて、児童生徒の主体的な学びへと繋げる実践を実施した。

実施期間は、2019年4月～10月である。

課題解決の方策に関しては、各学校において教頭が、学校経営に位置付け、中心となって計画して実行した。新たな実践だけでなく、前年度から継続して課題解決を行っている実践の場合は、それらも含むものとした。

学校図書館活用の教員研修プログラム確立へのプロセス

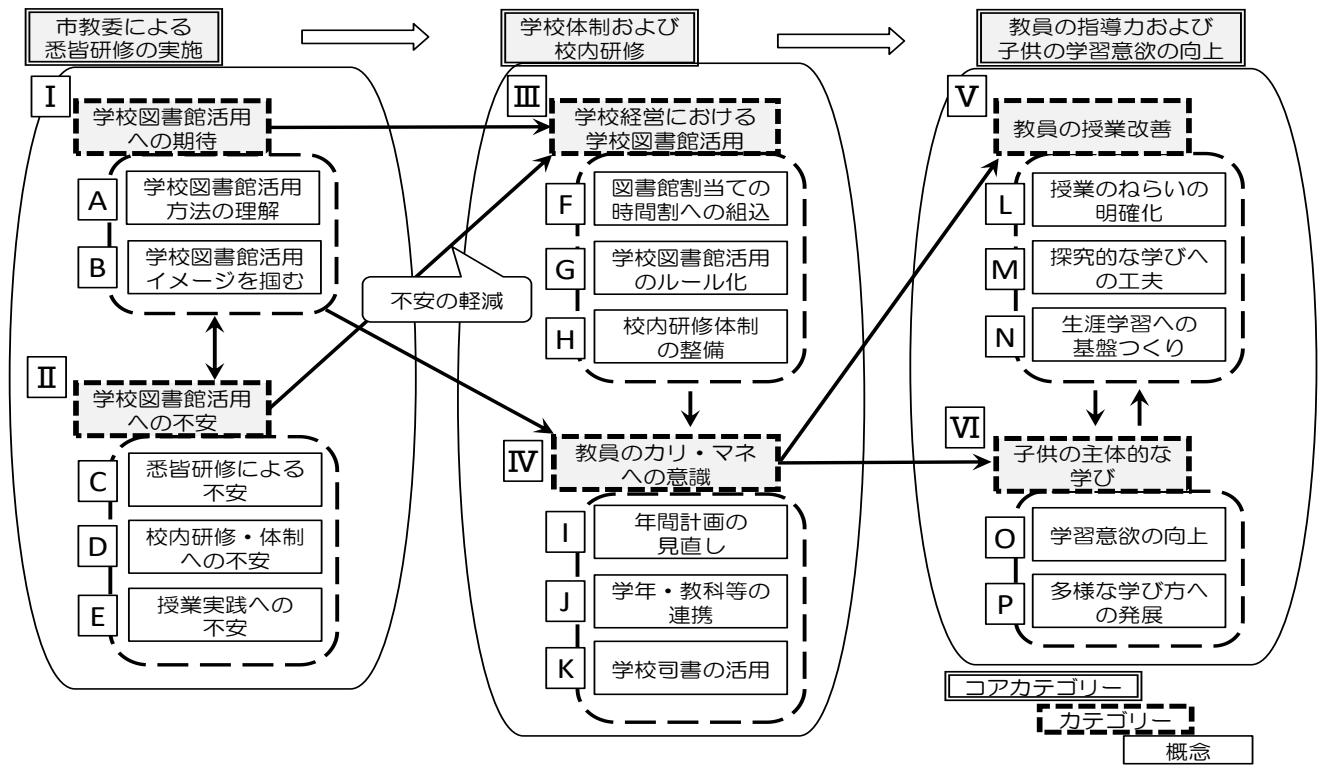


図3 結果図

2.3.1 A 小学校の実践

児童数 923 人 30 学級 常勤学校司書配置校
結果図に当てはめた自校の課題

I, II, III-F・H, IV-I・K, V-L, VI-O

本校は、学校経営案に基づきベテランの司書教諭と、常勤の学校司書により学校図書館部が組織され、定期的に全学年が集まる形で、学校図書館部会が行われている。4年目教員が学校図書館活用研修を行う際には、単元決定、指導計画の段階から学校司書と連携し、カリキュラム・マネジメントを意識した授業計画¹⁴を立てるように指示している。また、授業研究日は、教職員に周知し、授業を参観するように呼びかけている。

今年度は、4階に設置されていて利用しにくかった学校図書館の一部を、職員作業で2階に移動し、授業での活用と、児童の休み時間等の活用の推進を目指した。また、昨年まで設定されていなかった5・6年生の学校図書館の利用時間を時間割の枠内に設定し活用を促した。

4年目教員への聞き取りによる実態調査を行った結果、悉皆研修は、学校図書館の活用を通して、教科や単元を俯瞰し、カリキュラム・マネジメントの視点を

養う効果があることが分かった。しかし、研修で行われるのは、一回だけであるため、受講後も校内研修等で継続的に支援する必要があることが分かった。

そこで、今年度は、夏季休業中に、学校司書と教頭による学校図書館活用研修を実施した(図4)。研修後の教員の意識調査では、若年層教諭だけでなく、ベテラン層の教員からも「学校図書館の活用方法が分かった」「学校司書への依頼方法が分かった」「授業の中で、どのように学校図書館を活用すればよいかわかった」という意見が多く出された。また、学校図書館を活用した授業を受けた児童生徒からは、図書を使うと「物知りになれる」「好きなことをたくさん知れる」「他のことにも興味が湧く」という感想が出された。これらの結果から、校内研修は、全ての教員に有効な手立てとなり、学校図書館を活用した授業は、児童生徒に、主体的な学びをもたらし、学びへの自信に繋がることと推察された。

しかし校内研修は時間の確保が難しい面もあるため、一回15分程度のミニ研修等を企画して継続的に実施し、効果の維持や、授業力の向上を図ることが今後の課題となる。



図4 校内学校図書館活用研修風景

2.3.2 B 小学校の実践

児童数 841 人 27 学級 常任学校司書勤務
結果図に当てはめた自校の課題

I, II, III, IV-I・J, V, VI

本校は初若年層教員が多く、経験が4年に満たない教員が25学級中14名となっている。また、教職5年以上の経験を持つ教員でも、他市からの異動により、市川市が実施している図書館活用研修を受講したものは2名しかいない。そのため、学校図書館を授業の中で取り入れていく意識が低く、また、授業力にも課題を抱える状況にある。しかし、学校司書は市の正規職員であり、その支援により学校図書館を活用した授業を行う環境は整っており、学校経営案に基づき、教務主任を中心に研修を行い、初若年層教員を中心に活用に向けた授業の実践に少しずつ取り組んでいる。

今年度は、国語科主任及び学校司書を中心とした国語部会が、学校図書館を活用した授業の実践を行い、教員間で相互授業参観を行う場面を設けた。また、昨年度、学校図書館活用による授業実践を行った5年経験者が中心となって、初若年研修の中で指導や助言を行う場を設けている。いずれも教頭及び教務主任がア

ドバイザーとして参加し、運営や活性化を図っている。また、並行読書を取り入れた授業研究を計画し、校内研修として外部から講師を招聘し指導を仰ぐことで授業力の向上や教員の意識の向上を目指している。

さらに学校司書と連携し、児童への取り組みとして「読書マラソン」、「図書館スタンプラリー」を、国語科部会を中心に全校での取り組みとして実施している。貸出冊数を増やすことや児童が読書する種類・ジャンルを広げていく取り組みを行うことで、貸出冊数やジャンルの大幅な向上が見られた。

今後は教員の学校図書館活用スキルの向上、児童の本に対する意欲の向上を目指し、取り組みの効果を国語部会だけでなく学校全体で共有し、継続していくことで学校図書館の活用の活性化を図っていきたい。

2.3.3 C 小学校の実践

児童数 740 人 26 学級 常勤学校司書配置
結果図に当てはめた自校の課題

I, III-H, IV, V-M, VI-P

本校図書館は、初代校長大畑基金の流れを汲む大畑文庫があり、他校に比べて恵まれた予算があり蔵書数も多く、常勤の学校司書も配置され、恵まれた環境にある。

児童は総体的に「読書」は好きで、平成30年度の1人平均貸出冊数は、前年度比+4.3冊の55.2冊である。10月の読書週間、6月の平和のおりづる週間、2月の推薦図書週間等は、貸出数が増えている。

司書教諭とベテランの常勤学校司書を中心に、確かな学力「かしこく」部会の中に、図書館教育部会が置かれている。定期開催ではなく、年度初めと、必要に応じて開催されており、読書月間の取り組みや、図書の購入等について話し合いを持っている。

新学習指導要領の本格実施に向けて、カリキュラム・マネジメントを意識した授業計画の推進を図り、教育の目的や目標の実現に必要な教育の内容等を教科等横断的な視点で組み立て、学校図書館の機能を活用しなければ十分な効果があげられない。そのため、専門的な知識・技能を有する学校司書及び司書教諭と連携を図った授業の組み立てが必要となる。その連携のシステムを構築していく必要がある。しかし、常勤の学校司書が今年度末定年を迎えること、また、司書教諭も永年を迎えることから、学校図書館の機能が次年度にスムーズに引き継がれるよう取組を意図的に行う必要性がある。

今後の教頭の役割として、まず、カリキュラム・マネジメントについて研修する機会を設けることが必要

であるとする。そのうえで、新学習指導要領に基づき、どの教科のどの単元で学校図書館を活用すれば、「子供の主体的な学び」につながるのかを学校図書館部会を機能させて模索し、それらを踏まえたカリキュラムの作成を学校全体で行い、授業改善に繋げていく。

2.3.4 D 小学校の実践

児童数 622 人 21 学級 非常勤学校司書配置
結果図に当てはめた自校の課題

I, II-D・E, III-H, IV, V, VI

学校教育目標を踏まえた合言葉、「はあと（はな・歌声 挨拶 読書）」について、教育課程の中に意図的にこれらの活動を取り入れて振り返りを行うことで、学校教育目標にある「心豊かな子供の育成」の具現化に取り組んでいる¹⁵⁾。約 40 年間取り組んでいる読書教育については、その中でも柱となる活動と捉えており、読書生活を大切に考え、本に触れる機会を増やすことで「豊かな心」を育てていこうと、司書教諭と学校司書を中心に毎月全学年の担当者による図書館部会を開き、季節や月ごとに児童が読書に親しむ活動を設定している。

保護者や地域の協力も充実しており、毎週金曜日に実施している学級ごとの保護者による朝の読み聞かせや、約 40 名の保護者ボランティアが、環境整備・イベント・学習サポートの各部に分かれ、年間を通じて子供の読書活動を支えている。

また、平成 28 年度からは、新しい学校図書館のあり方を目指して、学校図書館に関する調査研究を進めている「日本学校図書館学会」の研究推進校の指定を受け、授業研究等で指導を得ている。

本年度は、7 月に教頭が司書教諭とともに市川市全体や本校の学校図書館の活用について研修講座で実践発表を行い（図 5）、「市川市全体で子供達の学びの環境づくりに力を注いでいることがわかった」、「資料が多く集められ、若い教員たちの育成がしっかりとシステム化されている」「授業研究における単元プランシートは、『身に付けさせたい力』を明確にし、授業を組み立てているので、授業力の向上に役立つと思う」、「校内研究が人材育成につながっている」等の講評や、多くの同学会員から今後の参考となる助言を得ることができた。

今後、学校図書館の活用において、アンケート等の結果から児童の意識や実態を継続的に把握し、これらにふさわしい研修の企画・立案をしたり、優れた実践に取り組んでいる学校の発表や講演を本校の教職員にフィードバックしたりして、今、必要とされる「児

童に身に付けさせたい力」をより明確化して行きたい。さらに、これらを具現化するための「生きた年間計画」の作成と教職員のカリキュラム・マネジメントの意識を高め、授業改善に導くことが教頭の役割であると考え、実践していきたい。



図 5 D 小学校発表風景

2.3.5 E 小学校の実践

児童数 313 人 13 学級 非常勤学校司書配置
結果図に当てはめた自校の課題 IV-I

本校は、「活力ある心豊かな子供を育む図書館活用」をテーマに、「①図書資料や多様な情報を適切に利用し、自らの課題を追究していこうとする態度を育てる。②読み聞かせや読書活動を通して読書に親しむ子を育て、子供達の豊かな心を育む」を重点目標として掲げ、学校図書館経営を行っている。また、市民図書館が設置されており、児童は、学校図書館と同時に市民図書館も利用でき、また市民図書館主催の行事等にも参加できる。

教頭としての大きな役割としては、教職員に学校図書館活用の意識を植え付けることである。そのためには、学校司書や司書教諭と連携し、学校図書館の利用や図書貸出の促進、また学校全体で取り組む読書活動の充実や委員会活動の活性化、市民図書館の有効利用等に、教頭が積極的に関わり、カリキュラム・マネジメントの意識を高める必要がある。具体的な取り組みとしては、校長が示す学校経営案を踏まえて年度当初に、学校図書館を活性化するには何ができるか、またどう授業改善に役立たせるかを検討させ、年間計画への位置付けを促し、重点目標の浸透と具現化を図った。また、日常的な広報活動として、利用実績や取り組み結果の周知、各教科領域の単元で活用できる図書の紹介等の取り組みを促した。結果として、今年度は学校図書館の利用頻度や図書貸出率も上昇し、教職員や児

童の意識が高まったと推察される。児童からの感想の中にも、「図書館が身近になった」とか「調べ学習の方法がわかった」等の声が上がリ、主体的な学びの場として学校図書館が活性化されたといえる。

今後の課題としては、教職員や児童の意識にはまだまだ個人差があり、全体的な底上げが望まれることや、蔵書の充実、人的配置の改善、また市民図書館と学校図書館の併用については、教頭が窓口となり、パイプ役として、円滑な連携ができるよう努めていくことがあげられる。

2.3.6 F 中学校の実践

生徒数 605 人 18 学級 非常勤学校司書配置
結果図に当てはめた自校の課題

I, III-F・H, IV-J, V-M, VI-P

自校の5～7年目の教員(6人)を対象に、質問紙による実態調査を行った結果、図書館活用は今後も積極的に取り入れたいという意見が多く出ている。しかし、生徒アンケートによると、「本を読むことは好き」と回答した生徒は全体の約73%であったが、「本を使って調べることは好き」と回答した生徒は約36%にとどまっている。また、平成30年度図書館授業活用授業時間数調査によると、年間の活用授業数493時間の中で、①総合的な学習 ②国語 ③美術での活用が比較的多かったが、数学、社会、理科、英語、保健体育においては活用の実績がなかった。生徒の活用状況は、貸出冊数が平成29年度は2,305冊だったのに比べ、平成30年度は1,561冊と大幅に減少している。学年別では、学年が上がるにつれ貸出冊数が、少なくなるという結果が出ている。

学校図書館の活用を学校経営に活かすためには、学校評価への位置づけも重要である。保護者アンケートにも学校図書館活用に関する項目を設定することが重要である。

上記のことを踏まえ、学校司書との話し合いの場を設定した。その中で、まずは学校図書館に足を運んでもらうよう工夫したいとの意見が出された。具体的には、生徒のニーズに合った本(雑誌や漫画、DVDも含む)の購入、図書委員会による「お勧め本の紹介」や「見出し」のさらなる工夫、入口の装飾等、意識高揚に向けた取組、そして教員対象とした図書館利用についての研修の企画等の意見が出た。また、ICTを活用した学習との共存に向けた教材の「すみ分け」も必要であり、さらに教務主任、研究主任を交えて組織での取組に繋げていくことも重要であるという意見が出された。

今後は、学校図書館の紹介方法や館内の装飾の工夫を行う等、周知、利用の増加に向けた取組の充実に努めていきたい。また、教職員を対象に、学校図書館の学習における有効的な活用方法の周知にむけた機会を作ることも考えたい。学校図書館を身近に感じ、足を運ぶことがきっかけとなり、様々な本を目にすることで知的好奇心が刺激されることが、主体的な学習につながるものとする。今後の課題としては、情報化が進み、情報収集はネット検索による手段が主流となっている中で、いかに本の良さを子供達に伝えていけるかを検証していくことである。

2.3.7 E 中学校の実践

生徒数 333 人 11 学級 非常勤学校司書配置
結果図に当てはめた自校の課題 IV-I・J・K

本校では、読書の意義を踏まえて「朝読書」に取り組んでいるが、学校図書館の活用については十分とは言えず課題となっている。また、全国学力状況調査の結果を見る限り、学力向上は本校の喫緊の課題である。そこで、昨年度からユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業づくりをテーマに研究を推進している。具体的には①学習環境、②教育課程、③指導方法、④個別指導の四つの視点をもって授業改善に取り組んでいる。年度当初から、①学習環境を整え、10月の自主公開授業研究会に向けて、③指導方法の工夫を見出し、年度末には1年間の取組や反省を踏まえて次年度の②教育課程を見直して年間計画を立てたり、④個別指導として家庭学習の支援の在り方を検討したりしてPDCAの確立を目指してきた。一方、昨年度は令和3年度の新中学校学習指導要領全面実施に向けたカリキュラム・マネジメント確立への3カ年計画も立て、生徒や地域の実態把握に努め、学校教育目標を踏まえた目指す生徒像や各教科を通して育てるべき力が何かを検討し、学校グランドデザインの構築に取り組んだ。したがって、本校のカリキュラム・マネジメントにおける教科横断的視点は、学校の教育目標を達成するためのものであることはもちろん、複数の教科学習を連関させて各教科の学力向上をねらうものでもある。

こうしたカリキュラム・マネジメント確立に向けた3カ年計画の2年目となる本年度は、学校図書館の活用を一方策として取り入れることとした。具体的には、まず年度当初に、①学習環境の整備をした。各学年行事や各教科等の年間計画を概観し、例年必要とされている図書資料を予め各学年室に移動するとともにbook カートも設置して活用しやすくした。また、10月に自主公開授業研究会を実施し、教科横断的な学習

単元の開発に伴い、有用に働く図書資料の発掘・開発に取り組んだ。11月以降は、今年度4年目の教職員が在籍していることから、悉皆研修としての図書館を活用した授業づくりを校内研修として機能させて、全教職員による図書館活用に関する研修を組織することにした。そして年度末には、教科横断的視点に図書館活用が有機的に働くような各教科等の年間計画の作成に取り組むことにした。

このように、カリキュラム・マネジメント及び学校図書館活用体制における教頭の役割は、「現状分析及び全体計画立案」、「生徒及び職員の実態に鑑みた年間計画立案における助言・指導」にある。具体的な手立てとしては、組織の編成及び運用（教科主任会、教科部会、研究部会等既存の会議を活用・連携させる）や、情報提供及び試案提示（研究主任や教務主任、学校司書への情報提供や具体的な試案の提示）、進捗状況確認及び助言（日常的な会話・授業参観・人事評価制度の活用）を行う。その成果をとらえて次年度に結び付けることが課題である。

2.4 7校の児童生徒へのアンケート調査の結果

教頭が各校の課題を明らかにし、課題解決のための方策をたてて実践を行った後に、学校図書館を活用した授業を行った学級の児童生徒348人（小学校2年生～中学校2年生）に対して、アンケート調査を行った。

その結果「本を読んでどうなりましたか」（図6）という設問に対して「他の本も読みたくなった」と30%が回答し、最も多い結果となった。また「新しいことを発見した」は、24%となり、2番目に多い回答となった。

これらの結果から、学校図書館の活用が、児童生徒の主体的な学びに繋がったことが推察される。さらに、

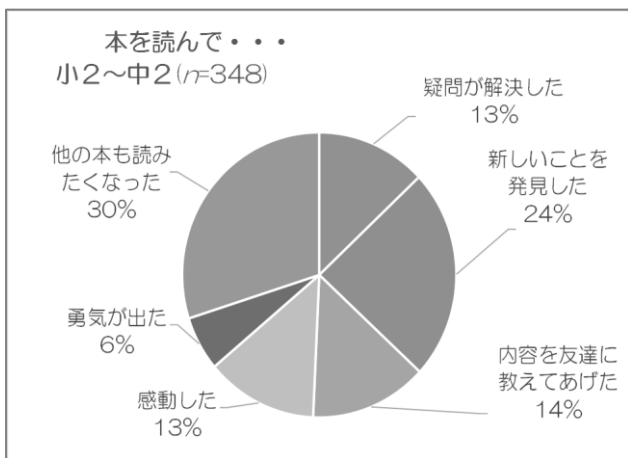


図6 アンケート調査の結果

「内容を友達に教えてあげた」が、3番目で14%の回答となった。この結果からも、児童生徒の学びが、自らが得た情報を他者に伝えることで、対話的で深い学びへと深化していることが伺える。

2.5 学校図書館活用の教員研修プログラム確立へのプロセスを活用した教頭の意見

各学校が、課題解決のための方策をたてて実践を行った際に用いた、学校図書館活用の教員研修プログラム確立へのプロセスの活用方法や有効性について、実践後に教頭から意見を求めた。

その結果、「学校図書館の活用に関する課題の全体像が確認できた」と全ての教頭が述べている。学校図書館活用の教員研修プログラム確立へのプロセスのストーリーラインを7人の教頭が共通理解したことによって、学校図書館の活用に精通していない教頭でも、16の概念から各学校の課題を明らかにすることができた。

また、教頭自身が気づかなかった課題についても、学校図書館活用の教員研修プログラム確立へのプロセス内の概念やカテゴリーから確認でき、新たな視点を持つことができた。さらに、課題解決のための実践を行う際に、教員に、その意義や必要性を説明する際にも活用でき、これをもとに、学校経営案（表19）を踏まえて学校ごとに概念を追加したりカテゴリーを変更したりすることも可能ではないかと述べていた。

表19 学校経営案例（一部抜粋）

<p>確かな学力～自分の考えをもち表現力をつける教育の推進</p> <p>1 学習指導の充実</p> <ul style="list-style-type: none"> ①基礎基本の確実な定着 <ul style="list-style-type: none"> ・個に応じた指導の充実・家庭学習の啓発 ②深い学び <ul style="list-style-type: none"> ・課題解決学習の推進・コミュニケーション能力の育成 <p>2 教職員の資質向上</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教師の専門性の向上・初若年層研修の充実 <p>3 特別支援教育の充実</p> <ul style="list-style-type: none"> ・校内体制の充実 ・交流活動の充実 ・ユニバーサルデザインを取り入れた教育活動 <p>4 <u>学校図書館活用（読書教育）の充実</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・学習センターとしての機能充実と利用拡大 <p>5 情報教育の推進</p> <ul style="list-style-type: none"> ・情報リテラシーの獲得・情報端末導入を見据えた研修
--

3. 考察

3.1 学校図書館活用の教員研修プログラム確立へのプロセスについて

学校図書館活用の教員研修プログラム確立へのプロセスの作成によって、学校図書館活用における課題が

可視化され、各学校における課題を明確に捉えることが可能となった。これによって、課題解決の方策が立てやすくなったと考える。

実際に、教頭が、各学校の学校図書館活用における課題を明らかにする際には、自校の課題と考えられる項目を学校図書館活用の教員研修プログラム確立へのプロセスの中から概念やカテゴリーを抽出し、その解決のための方策を検討する作業を行った。教頭らは、プロセスが3つのコアカテゴリー「市教委による悉皆研修の実施」→「学校体制及び校内研修」→「教員の指導力及び子供の学習意欲の向上」の順に集約されており、それらが6つのカテゴリーに分かれ、さらに16の概念に細分化されているため、自校の課題についてどこから手を付けて、どこを目指して行けばよいのかが分かりやすかったと述べている。

また、実践を行う際に、教員にその意義や必要性、目指すべき方向性を示す際にも役立ったと述べている。学校図書館活用ガイドラインに校長は館長であると示されているが、学校図書館の活用は、教員だけでなく教頭を含めた管理職についても、十分に理解されているとは言えない現状がある。学校図書館の活用に精通していない教頭が、ゼロベースから課題を考えて実践を行うには難しい面があると推察される。このような中で、学校図書館活用の教員研修プログラム確立へのプロセスは、学校図書館活用に精通していない教頭にとっても、課題解決の方策をたてる際の一助となり得ると推察された。

また、本市では学校評価を7月と12月の年2回行うため、課題解決のための取組みについて年度内の前期に実施して検証し、後期にむけた改善策を講じることができる。そのため、学校図書館の活用における課題についても、前期に立てた課題を短期間でPDCAサイクルを回し、学校評価を踏まえて教職員の意見を取り入れながら、後期に向けて授業改善等に活かすことが可能となる。したがって、学校評価を踏まえ、自校の課題に合わせて、概念を追加したりカテゴリーを見直したりすることも可能となる。学校図書館活用の教員研修プログラム確立へのプロセスは、様々な学校で実態に合わせて変化させることで、学校経営に合わせて汎用的に活用できるという可能性が推察された。

3.2 教頭のかかわり

本研究では、学校図書館の活用に関する課題解決を行うにあたり、教頭が中心となって、実践を行った。本市では、教頭会の中に8つの研究部会が組織されている。今回は、筆者の所属している「教育計画部会（教

育課程・カリキュラム・マネジメントについて研究）」のメンバーで実践を行った。各学校における課題は様々であるが、教頭が関わることによって、学校図書館の活用が、学校経営の一部として機能し、カリキュラム・マネジメントを踏まえた活用になったのではないかと考える。今回、学校種別は、小学校4校、中学校2校、学校規模は、義務教育諸学校等の施設費の国庫負担等に関する法律施行令における標準規模（12～18学級）の学校が2校、小規模校1校、大規模校4校で行った。

各学校の実践から、学校種や学校規模に関わらず、それぞれの学校が、学校図書館活用の課題を明らかにし、教頭を中心とした課題解決のための校内体制及び校内研修の推進が図られたことが分かった。

学校図書館の活用は、学校教育目標を具現化するために行われる学びのツールの一つである。その活用は、授業を教科や単元だけで考えるのではなく、全ての教科領域を横断的に捉えるため、カリキュラム・マネジメントの視点を持って行うことが重要である。7校の学校図書館活用における教員研修プログラムから課題としてあげた項目は、様々であるが、IV「教員のカリ・マネ（カリキュラム・マネジメント）への意識については、7校全てが課題としてあげていた。

そのため、教頭が中心となって学校図書館の活用を全教職員に発信することで、チーム学校として学校図書館活用の推進が図られ、学校教育目標の具現化への一助となったと考える。教頭が主導することによって、教務主任や研究主任、教科主任等へスムーズに働きかけを行うことができ、教員が学校図書館の活用を、カリキュラム・マネジメントを念頭に置きながら、それぞれの校務分掌から主体的に計画・立案し、実践するようになったことが推察された。

また、教頭が関わることで、学校評価との関わりを意識することもできた。実際に、学校評価における自己評価や保護者アンケート等へ、学校図書館の活用に関する項目を設定した学校は、7校中5校であった。

このように、教頭が、学校図書館活用の教員研修プログラム確立へのプロセスを踏まえて、各学校の課題を明らかにすることで、学校図書館活用を学校経営の一つとして位置づけ、市の悉皆研修である4年目研修と校内研修を効果的に繋ぐことが可能となると考える。

3.3 教員の意識の変容

多くの教員は、学校図書館の活用は、とても大切であると考えている。しかし、実態としては、活用の仕方が分からなかったり、時間的な制約があったり、校

内での調整がうまくいかなかったりして、積極的な活用にはいたっていないことも多い。

今回の各学校の実践を通して、教員から「学校図書館の必要性を改めて感じた」、「学校図書館の活用の仕方が分かった」、「図書を活用することの大切さを再確認した」、「図書館の活用は、年間計画に位置付けて、カリキュラム・マネジメントを意識しないといけない」等の感想が多く寄せられた。また「これからの時代には、必要なスキルだと思う」、「これからの時代を生きる子供達に伝えていかなければいけないことだと思う」という、生涯学習へ繋げる意見も複数見られた。

さらに、「11. 学校図書館活用は、授業改善にどのような点が繋がると思われますか」の問いに対しては、4年目教員 26 人全員が「授業改善に繋がる」と回答した。その理由として、「自分が興味を持ったことをさらに調べ、深めることができるので、主体的で深い学びにつながると思う」、「分からなかったことを調べていくことで、子供の探究心につながると思う」、「子供の興味・関心をより深く、より広く持たせるためのツールとして活用していくことができる」、「子供が受け身でなく、主体的に学んでいくことができる」、「課題に対して多くの情報を得ることによって多面的な見方や考え方に発展する」等があげられた。

学校図書館の活用は、教員が重要性を感じていながらも、様々な理由からその活用に至らないケースが多い現状がある。したがって、学校体制として学校図書館活用を位置づけ、教員が無理なく活用できるように年間計画の中に取り入れたり、時間割の枠の中に学校図書館の活用時間を組み込んだりすることで、活用が推進されると考える。

さらに、教員の実態や要望を踏まえた校内研修を定期的に行うことで、より活用の推進が図られることが推察された。

3.4 児童生徒の姿

学校図書館を活用した授業を実施した各校の児童生徒のアンケート調査からは、主体的な活動や対話的で深い学びへ繋がる活動が確認された。

授業後の児童生徒のアンケート調査では、「物知りになれる」や「学校で習わないことを自分で自由に調べられる」、「友達と協力してできるのが楽しい」等の感想が出された。

また、教員へのアンケートからは、「休み時間に、子供達が図書室に行って自分たちで調べるようになった」や「分からないことがあると自分から図書館へ行くようになった」、「自分で調べたことを、他クラスや下級

生にも伝えたいと言い出した」等の事例が出された。

このことから、児童生徒は、学校図書館を活用した授業から、自ら意欲的に学ぶようになり、学び方を習得しつつあることが伺える。さらに、自ら図書室に足を運んだり、学んだことを情報発信したいという言動が現れたりしたこと等から、対話的で深い学びも獲得しつつあることが推察された。

3.5 総合考察

学校図書館活用の教員研修プログラム確立へのプロセスをもとに、教頭が、課題解決のための実践を行うことによって、以下の3点が明らかになった。

- ①校長の示す学校経営案を踏まえ、教員がカリキュラム・マネジメントを意識した研修となった。
- ②各分掌へのスムーズな役割分担が行われ、それぞれが主体的に研修を計画し、実行することが出来た。
- ③チーム学校として、教職員全員が丸となって、学校図書館を活用することが可能となった。

①～③によって学校図書館の活用は、「児童生徒の新たな学びへの主体的な行動を促す」、「未踏の知への意欲を誘う」、「自身が獲得した情報を他の友達とも共有したいという対話的な学びへと繋がっている」ことが推察された。また、学校図書館を活用した授業を実践した教員はこのような児童生徒の姿を目の当たりにし、学校図書館活用の重要性を再認識するようになっただけでなく、学校教育目標を踏まえて、授業を工夫し改善しようという姿勢を示し、カリキュラム・マネジメントを意識するようになった。これによって児童生徒の学びは、さらに深まることが期待できる。

しかしながら、学校図書館活用の教員研修プログラム確立へのプロセスは、概念やカテゴリー、コアカテゴリーの形成について、丁寧に理論的飽和化を目指して行ったが、4年目研修の受講者にしかインタビューを行っていないため、限られた視点で形成されたものである。4年目研修の受講者以外の教員に、学校図書館の活用についてインタビューを行うことで、他にも新たな概念が形成される余地があると考えられる。学校図書館活用の教員研修プログラム確立へのプロセスを全ての学校の学校図書館活用研修に活かすためには、4年目研修を受講していない教員に対してもインタビューを実施する必要があるのではないかと考えられる。

また、学校図書館を活用する学校事情も様々であり、各学校において全ての課題が解決に至るとは限らない。校内研修の方法も様々であり、校内研修にまで至らず、校内体制を整える段階までにとどまっている学校もある。どのような学校事情であっても、学校図書館の活

用が推進されるような学校体制づくりを行っていく必要があると考える。

本研究は、市内の教頭がチームとなって、初めて行った実践である。今後、全ての学校での活用を視野に入れ一般化していくためには、さらなる工夫改善を続けていくことが重要である。

4. 結論

本研究では、市川市教育委員会の実施した教員研修プログラムの効果を高め、校内研修と効果的に繋ぐために、市内7校の教頭がチームとなって、学校図書館を活用するための校内研修を学校経営に位置付け、児童生徒に学び方を身に付けさせるための授業改善に繋げる方策を検討した。

その結果、学校図書館活用の教員研修プログラム確立へのプロセスを踏まえて、教頭が関わることによって、教員は、学校経営案を踏まえ、学校図書館の活用を通してカリキュラム・マネジメントを意識した授業改善を行うようになることが分かった。また、児童生徒は、学校図書館の活用によって、学び方を習得し、さらに様々な情報に触れることで、主体的・対話的で深い学びを獲得することが推察された。

今後は、全ての教員が、児童生徒に学び方を身に付けさせる授業を展開できるようにするための学校体制の推進及び継続とともに、校内研修の工夫・改善・強化を行うことが課題である。

また、これらを7校だけの実践に留めず、教頭会を通して、市内全校に広めていくことも重要である。それによって、教頭がやがて校長の立場に立った時に、学校図書館の館長として、存分に采配を振るうことができるようになると思われる。

引用・参考文献

- 1) 文部科学省. 小学校学習指導要領解説 総則編. pp.91-92
- 2) 富永香羊子・中村康則・向後千春. “学校図書館を授業で活用するための教員研修プログラムの開発とその効果に関する研究”. 日本教育工学会論文誌. 2018, Vol.42, Suppl, pp77-80.
- 3) 文部科学省. 平成 29 年度小・中学校新教育課程説明会（中央説明会）における文科省説明資料. 2017-09-28.
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/_icsFiles/afiedfile/2017/09/28/1396716_1.pdf

(参照：2019.10.1)

- 4) 文部科学省. “子どもの読書サポーターズ会議”. 2007.
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/dokusho/meeting/_icsFiles/afiedfile/2009/05/08/1236373_1.pdf
(参照：2019.10.1)
- 5) 千葉県市川市立富貴島小学校. 平成 23 年度研究のまとめ. 2012, pp.1
- 6) 市川市教育委員会教育委員会センター. 学校図書館支援センターリーフレット 2019.
- 7) 松本美智子. “小学校教員の学校図書館に対する意識と利用の実態：質問紙調査と面接調査より”. 慶應義塾大学学術情報リポジトリ. 2012, pp.55-84.
- 8) 堀川照代「学校図書館ガイドライン」活用ハンドブック 解説編 2018. 悠光堂
- 9) 平久江祐司. 学校図書館及び司書教諭に対する校長の意識の在り方：東京、大阪、京都の高等学校校長の意識調査の分析をもとに. 日本図書館情報学会誌. 2003, 49 巻, 2 号, pp.49-64.
- 10) 文部科学省 学校図書館の整備充実に関する調査研究協力者会議. 2016
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/115/index.htm(参照：2019.10.1)
- 11) 木下康弘 グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践－質的研究への誘い 2011 弘文堂
- 12) 木下康弘 ライブ盤 M-GTA－実践的研究法 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて 2010 弘文堂
- 13) ユーザーローカル AI テキストマイニング <https://textmining.userlocal.jp/> (参照：2019.10.1)
- 14) 天笠茂 カリキュラム・マネジメントとは 独立行政法人校内研修シリーズNo.21. 2018
- 15) 山口重直 翔べ 未来へ!! 読書の街市川の創造～三十年の軌跡と未来像. 1994 国土社

謝辞

本研究におきまして、ご指導をいただきました、青山学院短期大学 堀川照代教授、千葉大学教職大学院 重栖聡司教授に対しまして心より感謝申し上げます。

また、調査にご理解とご協力をいただきました、市川市教育委員会教育長 田中庸恵様、同教育次長 松丸多一様、調査にご協力くださった校長先生、教頭先生をはじめ教職員の皆様に心より感謝申し上げます。